

第22回地域医療連携交流会を開催しました

当院は地域の方々と一堂に介するこの機会を大切にしております。
この度は、138施設、341名の皆様にご参加いただきました。

是非、当院の交流会にご参加いただき地域の皆様との交流を深めていただきたいと存じます。そして、これまでも、これからも共に地域医療を守る仲間として、さらに連携を密にして地域医療に貢献していく所存です。患者さんのご紹介、診療情報の提供依頼、当院に対するご意見など、地域医療連携室が迅速に対応いたしますので、ご遠慮なくお問合せください。今後も地域医療機関を含む地域住民から選んでいただける日赤さんを目指して精進して参ります。



院長挨拶



司会(第二部)

國部伸也 姫路市医師会長

乾杯

医師紹介

閉会の挨拶

「第105回日本呼吸器学会近畿地方会」にて、 臨床研修医が「優秀演題賞」を受賞しました

受賞者より

先日、呼吸器内科で経験した「間質性肺炎の治療中に両側のニューモトセルと気胸を発症し、外科的瘻孔閉鎖術を行った症例」について、学会で発表させていただきました。

私にとって初めての学会発表だったため、不安も大きかったのですが、指導医の先生方が症例の整理や文献の調べ方、スライドの工夫、発表練習まで丁寧に指導くださいました。そのおかげで自信を持って本番に臨むことができ、発表後には「優秀演題賞」という評価をいただくことができました。大変光栄であり、今後の励みにもなっています。

姫路赤十字病院での研修では、日々多様な症例を経験できるだけでなく、学会発表や症例報告といったアウトプットの機会が豊富にあり、学んだことを自分の言葉で表現する力を養うことができます。さらに、先生方は常に熱心で親身にサポートしていただき、疑問点や不安を一つひとつ解消しながら安心して研修に取り組むことができるのも大きな魅力です。

今回の発表を通して、知識を深めるだけでなく、それを分かりやすく人に伝えることの大切さを実感しました。今後も学ぶ姿勢を忘れず、一人でも多くの患者さんに貢献できるよう研修に励んでいきたいと思っています。

初期研修医2年目 小西 杏花

指導医より

小西先生、第105回日本呼吸器学会近畿地方会での優秀演題賞の受賞、本当におめでとうございます。今回は経過が複雑な症例でしたが、わかりやすさを意識してスライド作成と発表準備に取り組んでいたのが印象的でした。学会当日は、著名な先生方が審査員を務められる中で、座長からの質問にも自信を持って対応されており、先生の成長が感じられました。

今回の症例報告を通して、忙しい毎日の中で少し立ち止まって考えることや、経過をまとめてプレゼンテーションすることの大切さを学べたのではないかと思います。ぜひ、今後の臨床にも役立てていただけると嬉しいです。

第二呼吸器内科部長 真下 周子



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

姫路赤十字病院

〒670-8540 兵庫県姫路市下手野1-12-1

電話 079(294)2251代

URL: <https://himeji.jrc.or.jp/>



ホームページ

姫路赤十字病院だより No.50

発行日 令和7年10月 発行 姫路赤十字病院

発行責任者 院長 岡田 裕之

編集責任者 広報推進室長 五百蔵 智明

姫路赤十字病院だより No.50

命をつなぐ赤いネットワーク

オール姫路赤十字の周産期医療



院長補佐
兼 周産期母子医療副センター長
兼 第一小児科部長

五百蔵 智明

Izoi Tomoaki

副院長
兼 周産期母子医療センター長
兼 第一産婦人科部長

水谷 靖司

Mizutani Yasushi



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

姫路赤十字病院



副院長 兼 周産期母子医療センター長
兼 第一産婦人科部長

水谷 靖司
Mizutani Yasushi

院長補佐 兼 周産期母子医療副センター長
兼 第一小児科部長

五百蔵 智明
Ioroi Tomoaki

地域とともに命を守る、姫路赤十字の周産期医療

姫路赤十字病院総合周産期母子医療センターは、平成27年に兵庫県から総合周産期センターの指定を受けて10年を迎えました。周産期スタッフのみならず、関連各科・各部門のスタッフが丸なり、24時間365日体制で母体と胎児、新生児の命を守ることを使命としています。

2024年度の年間分娩数約600件、母体ならびに新生児搬送数はそれぞれ、約160件、270件と県内最多を誇り、分娩施設からの紹介を多数受けています。妊娠・出産・新生児医療を一体化したシームレスな体制を整え、母体救命と新生児管理を同時に実施できる点が最大の特徴です。

地域の産科施設と連携し、どの施設で出産しても安全が確保される「オール播磨の周産期ネットワーク」を目指しています。当院周産期医療の強みを産科部門、新生児部門それぞれについて紹介させていただきます。

産科部門

産科部門の強みの一つは、通常の分娩対応にとどまらず、がん合併妊婦や前置癒着胎盤妊婦など、極めて高リスクな症例にも安全に対応できる総合力です。

●がん合併妊婦への対応 ― 出産と治療の両立を支える

当院は地域がん診療連携拠点病院として、妊娠中ががんが判明した妊婦に対しても、出産と治療の両立を支援しています。「妊娠継続は難しい」と他院で告げられた妊婦に対しても、十分なインフォームド Consent を行い、妊娠継続を希望される場合には、最善の方針をチームで検討します。実際に、乳がん合併妊婦では妊娠中に化学療法を行い、出産時期を調整して誘発分娩後に乳がん手術を実施。また、子宮頸がん合併妊婦では化学療法後に妊娠30週あたりで帝王切開を行い、続けて広汎子宮全摘術を施行しました。産科・婦人科・外科・麻酔科・小児科などが連携し、母体と胎児の命をともに守る体制を整えています。

●前置癒着胎盤への挑戦 ― 多職種チームが命を守る現場

前置癒着胎盤は大量出血を伴う極めて危険な疾患です。当院では、術前に自己血貯血を行い、手術当日は産科医、小児科医、放射線科IVR医、麻酔科医、放射線技師、助産師、手術室看護師がハイブリッド手術室に集結します。動脈バルーン塞栓用カテーテルを挿入後に帝王切開を行い、胎盤の位置に応じて子宮底部切開を選択。麻酔は新生児への影響を考慮して脊椎くも膜下麻酔を第一選択とし、必要に応じて全身麻酔へ移行します。輸血体制も整備し、大量出血を想定した周術期管理を徹底。これまで多数の症例を安全に乗り越えてきました。

新生児部門

新生児集中治療室(NICU)が18床、新生児治療回復室(GCU)が24床の計42床あり、2024年度は病的新生児の入院数は765名でした。そのうち出生体重が1000g未満の超低出生体重児の入院数は21名を数えました。経験豊富な医療スタッフのもと人工呼吸管理を237件、その他にも重症な新生児に適応となる新生児低体温療法を2件、一酸化窒素吸入療法を14件、持続緩徐式血液ろ過透析を3件行いました。また、新生児専用救急車を有しており、播磨姫路圏域の産婦人科医院や病院産婦人科からの新生児搬送を24時間体制で行っており、地域からの搬送依頼には常に対応できるシステムを構築しております。昨年度の搬送件数は267件と全国でも屈指の症例数でした。

このように地域からの入院依頼をお断りすることなく多数の症例を当院で診療できるのも、ひとえに院内の周産期医療に関わる多職種の関係者の方々や、地域の産婦人科医院や病院産婦人科をはじめとする医療関係者や行政の方々のご協力とご理解の賜物と常日頃から深く感謝しております。私たちNICU/GCUのスタッフは病的な新生児の速やかな回復とご家族の安心を常に目指しております。そのためには今後も皆様からのご協力とご理解が必要不可欠であることは言うまでもありません。私たちはこれからもしっかりとこの地域の周産期医療を守り続けたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

深化と新化で進化のために ―播磨姫路周産期協議会の立ち上げ―

3つの地域周産期病院―県立はりま姫路総合医療センター、姫路聖マリア病院、公立宍粟総合病院―とも協力して、今後も「オール姫路赤十字」のチーム医療で、地域の母と子の命を守り続け、地域の妊婦さんや先生方が安心して出産して頂けるような運営を目指していきたいと存じますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

来年には、行政機関や播磨姫路の保健医療機関とともに播磨姫路周産期協議会を立ち上げ、今後想定される南海トラフ大地震や新興感染症への対策、母体や新生児搬送時のより良い対応等を検討する場としたいと考えておりますので、ご協力のほどお願い申し上げます。

副院長 兼 周産期母子医療センター長
兼 第一産婦人科部長
水谷 靖司

院長補佐 兼 周産期母子医療副センター長
兼 第一小児科部長
五百蔵 智明